



THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 7

学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく国際
社会を生きぬく児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

2020(令和2)年
月2日発行 ロンドン日本人学校
令和2年度 第2号

「新型コロナ災禍を超えて その2 大切なこと」

校長 石山 秀樹

失って初めて気づく大切さ

今まではこれからも続くと思っていた学校生活。その学校生活が送れなくなると分かると、私は今まで以上に当たり前のことが恋しくなった。当たり前のことが必ず保証されるわけではない。学校閉鎖の期間は私にそんな基本的な考えを思い出させてくれたように感じる。

今しか出来ないこと

当たり前の大切さを知り、学校生活を早く送りたいと強く願う反面、学校閉鎖中にしか出来ないこともあるのだと気づくことが出来た。学校閉鎖中、私の父は在宅勤務をしていた。そのため、私は今まであまり知らなかった父の仕事の様子を初めて間近で見ることが出来た。中学三年生はそろそろ将来について考え始める時期である。学校閉鎖中、私は「仕事」というものがどのようなものなのか少し分かった気がする。

(中3A 原田 和瑚「学校閉鎖中の気付き」より)

これは、国語のオンライン学習支援の課題「Stay at Home」に対して提出された中学部3年・原田さんの作品の一部を、本人の許可を得て抜粋したものです。「学校を始めることができない」という事態は、児童生徒の皆さんにとってもちろん初めてのことだったでしょう。「当たり前」だった様々なこと…学校に行く、授業を受ける、友達とおしゃべりする等々…が失われ、家に留まらなければならない。原田さんは、その中で「当たり前」の大切さに気付き、「今できること」に目を向けています。児童生徒の皆さんは、そのようなロックダウン中の毎日をどのように過ごしたのでしょうか。自分自身と向き合い、その経験を自分自身の思いとともに書き留めておくことは、私はとても意義のあることだと思います。

英国では、ロックダウン中の木曜日の夜、NHSをはじめとするキーワーカーの人々に感謝の拍手を送る取組がありました。本校中学部棟の中3の教室の窓には、そのポスターが外に向けて貼られています。コンピュータやスマホがあれば何でも済んでしまうような気がしていた「当たり前の毎日」では、それほど意識することのなかった、「現場へ行き、社会を支える仕事」…医療のほか、モノを運ぶ流通、スーパーをはじめとする小売、人々

を運ぶバスや鉄道などの運輸の仕事など…に就く人々への「感謝」が示された、素晴らしい取組でした。私の父はかつて鉄道会社で働き、弟はやはり鉄道会社で今も乗務員指導にあっていますので、「どんなときにも現場に行かなければならない仕事」はよく分かるつもりです。私は、今回のコロナ禍を通じて、社会を支える「骨格」に改めて気付かされ、彼らの貢献により私たちの生活が支えられたことに対する感謝の気持ちが湧き上がりました。

翻って、本校の「骨格」は何か、と考えました。それは、先月号でもお伝えしたとおり、「子供たちに社会を生きぬく力をつけること」に尽きます。このうち、「学力」をつける取組は、学校一時閉鎖により先生方が0から取り組んだオンライン学習支援、そして現在の全校学年分割登校による制限付きの授業実践で進めてきました。しかし、もう1つの「人と人との関わりの中で培う力」…前回、「非認知能力」として紹介した力をつける取組は、先生方も様々な工夫をしながらも、現在の状況下では難しいところがあります。この状況を打破し、来たる2学期から本来の学校の取組を実践していくためには、「英国の感染状況が改善され、教育についての制限が撤廃されること」と、「現在日本に留められている令和2年度派遣教師が派遣されること」の2つが必要です。ロンドン日本人学校では、新派遣の先生方を一日でも早く迎えられよう、文部科学省、在英国日本国大使館をはじめ関係する各機関に働きかけを進めてまいります。

教職員の異動について

新たに、補助教師として ^{いしかわ みか}石川 美加 先生、支援員として ^{あんどう かおり}安藤 香織 先生の2名が着任しました。どうぞ、よろしくお願いいたします。